



# 静脩

1988年2月

特集号

The Kyoto University Library Bulletin

## 日本の教育と京都大学

甲南女子大学長 鯨坂 二夫  
(京都大学名誉教授)

初めてお目にかかる方も多かろうかと思いますが、ただ今、館長先生から大変恐縮な御紹介をいただいた鯨坂でございます。昭和7年に卒業いたしました。24年でございますか、教育学部が文学部から独立しました時に帰ってまいりました。そして22年間、世話になりました。47年までおりました。今、神戸の甲南女子大学を世話しておりますのであります。卒業生としてなつかしい母校にまいって、しかもこの記念すべき時に時間を与えられて、大変光栄なことと思っております。これ以上の慶びはございません。ただ、あまりに問題が大きすぎましてどうということになるかと思ったのでありますけれども、演題「日本の教育と京都大学」について皆様とご一緒に考えてみたいと思います。内容としては京都大学の教育学を担当なさった方々がどういう立場に立っておられ、その影響が日本の教育に対してどうあったか、そういうことを中心に申しあげてみたいと思います。

さて、ここに明治の方が何人おられますか。もちろん私も明治でございますけれど、明治という時代は今から考えてもまことに興味ある時代だったと思いますね。国は文字通り富国強兵の政策をとった。国を富まし軍隊を持って強い国になろう

という、そして明らかにその根底にあったものは強烈な国家主義と申しましょうかね、そういう流れがあったということは誰でも認めるだろうと思います。しかし果してそれだけだったか。こうなりますとまた新しい問題がいくらか出てまいりましょう。日本という国が——昔の言葉を使います——栄えた時期はどういう時期だったか、特に明治以後、これは様々な思想が、野の花のように咲いた時に日本が伸びている。何か一つの傾向だけですと伸びておりませんね。これは個人の場合でも、あるいは国の場合でもそうだろうと申せます。さまざまな思想がともどもに生きる。つまり、自由というものが現実に存在した時に人間が伸びると思います。あの国家主義で覆い尽くされていたと思われる明治にあっても、これと対立する個人主義というものがはっきり出てますね。

まあ2、3人の方を申しますと、例えば宗教で内村鑑三というような人が浮かんでまいりましょうか。私は高等学校の頃に——東京の成城という高等学校ですが——晩年の内村先生に三年ほどお世話になりました。毎日曜日、あの説教を聞きました。先生は全世界の教会に対して無教会という立場をとられた。これは強いものでしたよ。バイ

本稿は、昭和62年11月19日に開催した「揺籃記の京都大学——創立90周年記念展」記念講演会の記録である。

ブルー冊あれば十字架のキリストと直結できる。教会という建物や組織は必要ないという。今頃こういうことを言う人はあまりおりません。その流れをくんでいる人はいくらかおりますけれど、これは強かったですね。私はなにもその頃、キリス



鱒坂二夫名誉教授

ト教の信仰に入ろうとは思っていませんでした。生まれた家はまことに熱心な純朴な浄土真宗の家です。郷里は薩摩であります。薩摩はもう浄土真宗一点ばり。学生の時、鱒坂の家に養子に入ったのですが、これは神道でありましたね。浄土真宗から神道にかわる。そして高等学校の頃は内村鑑三先生のキリスト教。友人が「おまえも行ってみないか、きっと気が合うぞ」と言いますので何てこともなしに行ったんですよ。そうしますと最初の時に大変な影響をうけました。打撃をうけたといっていいいでしょう。ほんとにガンとやられたような気がしました。京都大学の学生になってわたくしはそれでも日曜日の朝、バイブルを持って教会にまいりました。ところがどうも牧師さんの話を聞いてますと違うんですな。これでもキリスト教というものか、と思いました。考えてみれば、自分は内村鑑三先生に三年間ついた、この牧師さんとは違うはずだと。それっきり教会に出入りするのはやめようと思いましたがね。これは内村先生の印象というものまで死ぬまでもとうとうという気持ちからであります。内村先生という人は本当に大変な方でしたね。よく言われましたよ、軍隊といえ

ども、財閥といえども、貴族といえども絶対おそれるなどね。常にただ一人、神のみをおそれよと。"神のみをおそれよ、"という言葉は強かったですね。もし私にいくらかでも何か強いところがあるとすれば、これはあきらかに内村先生からいただいたものだと思っております。

岡倉天心と申せばどなたも御承知ですが、「茶の本」"Book of Tea"というのを書いていますが、あの中で天心は何といったか。武士道をまず取り上げて、世界中で武士道というものは立派なものだとほめたたえている。日本という国が世界に知られたのは、日本の青年が満州の野で血を流して「日本という国は強い国だ、さすが武士道の国だ」という具合に理解している人が多いけれども、これは大変な間違いだと書かれている。武士道は死の業を教えたとか、いかに死ぬかを。そうでしょう。しかし茶は生きる業を教えていると。茶こそはまことの東洋の精神であると、こう教えている。ですからこれは日本の伝統に対する大変な反逆でありましようか。ああいう立場が明治の末にあった。

女性であれば与謝野晶子、平塚らいてうというような方々の名前が浮かんでまいります。与謝野さんという方にはお目にかかったことはございま



せん。その書かれた「みだれ髪」を若い頃に読んだことは今でも忘れません。一人の弟が旅順の攻防戦に行っている。"君死に給うことなかれ、"とうたっています。ああいう詩は彼女だけが詠んだんで、この大東亜戦争の時に誰がいったいあのような詩を詠んだか。今まで主権者の名前前で戦（いくさ）に行けと言われてたら無条件について行った

日本人に対して、戦争はいけないということを言い切った最初の詩でありましょうね。こういう気持ちは国家主義というものが圧倒的に強かった時代にもはっきりと存在していた。つまり、個人主義、自由主義というものが生きていたことの証拠になるでしょう。

また、幸徳秋水なんていう人を考えますと社会主義、無政府主義というようなものがだんだん芽生えておるといこともいえましょう。

明治の末という時代はそういう具合にいろんな思想が出て、そういう時に日本がぐっと伸びて行ったと見ていいと思うのであります。そういう時に京都大学が生まれている。そして大変な役割を果たしたと思うのであります。

また文学の世界でも様々な花が咲いております。漱石の「坊っちゃん」、*「吾輩は猫である」*、明治38、9年に出た。「三四郎」、「それから」、「門」などが41年から43年。「彼岸過ぎまで」大正2年。「こころ」大正3年。「明暗」大正5年、ちょうどそういう頃であります。有島武郎、これは印象に残っておるんですけどね。私の友人の映画俳優だった森雅之のお父さんでありますから。奥さんが早く亡くなりまして3人の子供を男手一本で育てあげた、大変子煩悩な方で、よく学校にもみえた。ああいう死に方をされたのでありますけれども。「宣言」が大正4年、「カインの末裔」大正6年、「惜しみなく愛は奪う」大正9年、「ドモ又の死」大正11年。12年に亡くなられた。芥川龍之介「鼻」大正5年、「藪の中」大正11年、「河童」昭和2年、「歯車」昭和2年、そして同じその2年に亡くなられた。ああいう人達の作品が本当にきらびやかに出たのが明治の末から大正の初めです。

哲学の背景を考えますというと、新カント派、ナトルプ、オイケン、ベルグソンといったような流れが強く日本に押し寄せてまいった。西田幾多郎先生の「善の研究」が明治44年であります。「善の研究」という本は、今は京都大学の学生諸君が読まれるか読まれないか知りませんが、我々の高等学校の頃はわかるうがわかるまいが「善の研究」を読まなきゃ学生じゃないことになっていた。あのむつかしい本をですよ。たぶん国語的に



西田幾多郎教授

理解したもんだらうと思いますが、とにかくみんな二遍読んだ、三遍読んだという、「善の研究」は高等学校の生徒の教養のまず第一の書でありました。何版重ねたか知りませんが、これは確かに明治、大正の青年たちに非常に大きな影響を与えた本であります。倉田百三があの本と出会って、そして本当にそうだと感銘したということ。「愛と認識の出発」の序文に書いておられますけれども、あの本が多くの人にいろんな影響を与えた。三木清がそうであり、その後の京都学派を守った人々がまず「善の研究」に出会ったのです。それが明治44年。「思索と体験」が大正4年。「自覚における直観と反省」大正6年。あのような立場が京都大学を根城に展開し、京都学派の基礎が固まり、ひろがって行ったと言えましょう。朝永三十郎先生の「近世における『我』の自覚史」大正5年でありますね。これも大変読まれた本であります。自我というもの、これを近世でみんながどのように認識し、打ち立て、確保したか。田辺元先生の「科学概論」大正7年。和辻哲郎先生「古寺巡礼」大正8年。こういう具合に明治の末から大正の初めにかけて本当にあのような人間の教養そのものをずばり示すような本が出ております。みんなこれを読んだのであります。最近の学生達、私は今、女子大学ですから、少し男子の大学と違いますけど、どういう本を読んでおりますか。こういうものには比較的疎遠でありますね。これはやっぱりいけないと思うんです。こういうものを——もう古典といってもいいかもしれませ

んけれども、若い人達がしっかりお読みになることは大事なので、いやしくも京都大学というものを志望するならばこういったものを充分読まれることが必要でありましょう。京都の哲学がどうであったか、それを担った人がどういう業績を残されたか。それを確かめてほしいと思います。

大正時代の一番大きな事件は、何と申しましても第一次世界大戦だと申せましょう。私は小学校の子供でありました。かなりはっきりとあの戦争を覚えています。長く続きました。友人のお父さんが行ったというようなことで、子供ながら心配したこともございます。日本は連合国側につきまして、そして連合国が勝ったという形でございませうか、太平洋の委任統治という——太平洋、これを日本だというような大変さかんな事でございました。しかし、その戦(いくさ)に勝った直後、大変な経済恐慌がやっけてまいりました。もちろんロシア革命、大正6(1917)年にあってから世界が動いてまいりますけれども、日本でも米騒動、どなたもご経験なかったと思いますが、大正8年でありませう。私が小学校5年生。広島の高師師範附属小学校におりました。高等師範の学生さんがよく遊びに来まして、あそこの米屋がやられた、こっちの米屋がやられた、怖い、怖いという事を聞きました。富山県に起きて熊本県に飛火し、全国に波及した米騒動でした。

日本の最初のメーデーがあったのは、大正9年でございませう。共産党結成、大正11(1922)年でありました。大正という時期は前半は明治が実を結んだという時期だとみていいと思います。そして後半は昭和が始まる暗い時期になってまいります。私は少年の日をその時期に送ったのであります。

昭和4年から5年、1929年から30年、日本の経済はどん底に落ち入ります。やがて昭和の悲劇が始まります。社会不安、政党の墮落、政治への不信。軍国主義日本であったのが軍縮が行われます。三個師団がなくなる。私の伯父は海軍でございました。軍人が制服を着て電車に乗ることをはばかったという、こういう時代があったのであります。三個師団の削減、昭和11年、軍縮によって軍人が

卑屈になってまいります。機関銃や大砲を持った者が卑屈になってきますと必ずどっかで何かうさ晴しをやりますね。この一つが“2・26”だったと思うのであります。この頃、私は浜松の師範学校で教鞭をとっておりました。号外が出て、東京は大変だという。軍隊が始まって以来、ああいうことはなかった、いや日本始まってああいう事はなかった。そういう事件が起きて上を下への大騒動でありましたね。これはしかし、軍の力で抑えてまいった。2・26、あのへんから軍の形がおかしくなった。統制がとれなくなりますね。世界一統制のとれた集団だと聞いておりましたけれど、それがああいう事件になりますと、だんだんおかしくなっている。危ないことですね。ついに大東亜戦争が始まります。昭和16年には国民学校令が施行された。教育のあり方が非常に変わってまいった。国民学校令、国をあげて総力戦という言葉のもとに軍も産業界も学校も教育も全部一つにまとめられたという動きがあつた昭和16年の国民学校令、これでよく示されると思うのであります。

さて、もう一寸前にかえります。教育の問題を考えますと、大正の時期というものは非常に教育の花が咲いた時期であります。自由教育の思想が強くてまいります。その一つの根源が京都大学であります。京都大学総長に沢柳政太郎という方がおられました。1865年慶応元年、松本に生まれ、そして明治21年、帝国大学文科大学卒業。明治30年、第二高等学校長。31年、第一高等学校長。わずか4カ月、一高の校長として文部省普通学務局長、39年、文部次官。ここで沢柳先生は日本の教育、義務教育を6カ年に延長した。これは沢柳政太郎先生の功績であります。44年に東北大学総長。46才でございませう。大正2年、48才でもって京都大学総長であります。有名な京大事件になって7名の教授を罷免した。こういうことが原因になって大正3年、退官されています。沢柳政太郎という方は、京都大学ではどっちかといいますとあんまり評判のよくない先生であります。しかし、私も、教育にかかわったものは高く評価しております。沢柳先生が京大の先生をされたために京都大学の教育は大変特徴のある教育でありました。



五代総長 澤柳政太郎

明治42年、「實際的教育学」という本が出ています。実に立派なものでありまして、今でも私どもはあれを読んでいるところが多いです。いわば、日本で初めて書かれた科学的な立場から教育を説いた本でありますね。「實際的、とやっていますのは、単なる観念じゃないんだという、単なる理論じゃないという、実際に根ざして科学的に探求した結果、科学的に認めうる原理というものをこれを教育の原理に考えた、「實際的教育学」。戦後、不思議なことに東京の人達がこれを取り上げて、ずい分とこの研究会をもちましたね。私どももこれに参加したことがございますが、沢柳政太郎という方は、行政官でもあります。文部次官を勤めて、さっき言った義務教育を6カ年に延長した。行政官でもあり、同時に学者でもある。そして同時に大学の総長も勤めたという、大変これは珍しい方です。私は沢柳先生が野に下って大正6年に造られた成城小学校、これの第一回卒業生だとさっき申し上げた。親しく先生のお声を聞いたことが何回もございます。最後は高等学校1年でございましたか、よく覚えておりますがね、非常に子供の好きな方でした。先生たちには厳しかったですよ。東北大学、京都大学総長、そして文部次官、貴族院議員、こうなってきますという民間の大御所と人が言うのは当然でしょうね。ですからこれが一成城小学校を造ったというんですから非常な出来事だと思えます。つまり、沢柳先生は「實際的教育学」というものをお書きになって具体的に教育

実践のことを考えて成城小学校を造った。これはまた大変ふるっておりますね。堂々と東京の新聞に成立の趣旨を出しております。こういう趣旨のもとに小学校を造るぞと、我と思わんものは集ってこいとね。ですから全国から本当に秀れた教官が集まってですね、数少ないですが、血判を押して来たという人がいます。長崎からみえた先生。そして沢柳先生が校長であって主事が藤本先生という京都の教育学出身の方が、であります。あとで小原国芳に代わります。後の玉川大学長、小原国芳。これはやっぱり京都大学の教育学の出身、小西先生の弟子でありますけれども、成城教育というものを彼が中心になり、沢柳先生主導のもとにやった。

大正期の日本の教育で、あの成城の自由教育、全人教育というものは非常に大きな影響を全国に及ぼした。特に初等教育においてね。有名な「八大教育主張」という講演会が大正10年に行われています。大日本学術協会の尼子さんが計画しました。これは国をあげての大きな出来事でありました。「八大教育主張」。手塚岸衛「自由教育論」、樋口長市「自学教育論」、河野清丸「児童教育論」、稲毛諄風、これは早稲田の教授「創造教育論」、千葉命吉「一切衝動皆満足論」、及川平治「動的教育論」、片上伸「文芸教育論」、小原国芳「全人教育論」と。これに対して奈良の木下竹次、あるいは野口援太郎、早稲田の北澤種一、西村伊作、羽仁もと子、という人々が論評を加えておりますけどもね。この大正10年の「八大教育主張」というものは、本当に歴史的なものとも見てもいいでありましょう。しかもこれが、2名の発表者を除いて全部現場をうけ持った実践人であったということ、多くが付属の主事でもありますね。こういう人々が自分がやっていることを、信念だけじゃない、実際にやっていることを発表した。今頃、教育界でこういう議論が聞かれませんか。私は情ないと思うんですよ。今頃聞くのは何です。偏差値でしょう。塾でしょう。いかにして東大に入るか、京大に入るか、ばかり言っている。教育はあるかと言いたくなります。

大正の頃はこういった理論家・実践家とともに

本当に教育の本質は何だろうか、我こそはという、こういう発表会をもった。良き時代だったと言っていいでありましょう。背後にあったのは、主として東京と京都の大学の教育学の担当者であります。東大は吉田熊次というこれも元老がおられた。京都には小西重直。沢柳政太郎先生が総長の時の京大の教育学の担当者は小西先生ではございません。谷本富という大変博学な先生でございました。また非常に個性の強い方。お元気な方でわたくしどもが昭和4年に入学したわけでありませんが、もうこの時には小西先生が講座をもっておられた。谷本先生はお退きになっておりますけれども、あらゆる会合に必ずみえて、初めから最後までおられた。印象に残っておりますが、谷本先生は1867年、慶応3年、讃岐の高松でお生れになった。いつもおっしゃっておられた。「讃岐で偉いのは、弘法大師と俺じゃ」という。こういって座られますと、お帰りになるまで一人でしゃべっている。大変な弁舌家でありました。東京大学で一番点数をとったのは吾輩だと、こう言われた。自分を「吾輩」と呼ばれましたよ。ハウスクネヒト(Hausknecht)について98点もろうたとね。何遍聞かされたか、98点を。ですから博覧強記とはこの先生のことでございましょう。随分たくさんものをお書きになっている。演説されますとこれがすぐ本になって出る、とこういったような方でありました。明治22年、東京大学文科の選科の学生でありますけれども、ヘルバルトの教育を紹介し、ヘルバルトの教えを説いたハウスクネヒト、これに師事した。明治27年に東京高等師範学校教授、31年に文部省視学官、36年京都帝国大学講師として、やがて文学部教授で教育学を担当された。おやめになった理由がございまして。大正元(1912)年、明治天皇が亡くなります。乃木大将が殉死したという。お若い方はご存じないかと思いますが、乃木大将——旅順で随分と兵隊を死なせた、陛下に対して申し訳ないという。明治天皇が亡くなりますと、自分も腹切って死んだのであります。この事件に対して、谷本先生は毎日新聞に懇望されて論評をいたしましたね。殉死は間違いと書いた。是じゃない非だとね。さあ、そこで世論が大

変なことであります。あの乃木大将の殉死を否定したわけですからね。当時の日本としてはこれは大変なことですよ。絶対天皇制のもとに、軍国日本であって、乃木大将といえば軍人の鑑であった。学習院の院長をおおせつかったあの乃木大将を、殉死したのは間違いだと、こう論評するのはこれは相当以上の勇気がなければいけない。また、相当な学問的良心がなければ言えません。ところが、当時の日本の情勢というものはこれを許しませんね。いや、もちろん支持者もおりますけれども、ついに谷本先生は京都大学教授、この席をおられた。殉死事件の論評が理由であります。あまり世間が表面的にその理由を申しませんけれども、こういったような大変勇気のある方でした。いけないことはいけないと、いいことはいいいてことをはっきり言い切る。今ですから私どもはこういう発言を平気でしますが、その頃の日本の情勢というものを考えますと本当に相当以上の学問的良心がなければこれは言えなかったこと。これを京都大学教授ははっきりおっしゃった。

昭和21年、80才で亡くなられるまで谷本先生は実にたくさんものをお書きになった。龍谷大学で講義しておられます。宗教と教育についての大変すぐれた本がたくさん出ています。明治39年に「新教育学講義」というのが出ていますけれども、これは何回かの講演(12, 3回)が一冊のこんな本になって集まったものです。その中で当時のフランスの状況が書いてございますね。これは大変参考になる、教育行政としては。たまたまドイツ、フランスに留学されたわけでありましてけれども、パリの大学であったことだという。ある時、ある日に限って大勢の人々が大学に入ってくる。二頭立ての馬車がですね、5, 6台おいてあるという。さすがフランスだと、大学教授たるものは馬車に乗って来るのかと思っていたらそうじゃなかったという。大学教授はとぼとぼ歩いてくる。馬車に乗ったのは貴婦人だった。どうしてかということ、教授の授業を聞きに来る。つまり公開の講義でございましてね。大きな講堂があって、まん中にテーブルはあってある。そのテーブルの前の方は学生がずらっと並んでいる。テーブルのうしろは一般市民。

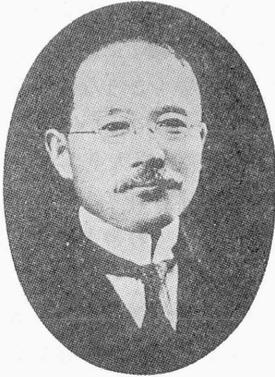
さっきの貴婦人もまじえて聞いている。そこに教授が立って講義をやっているという。日本の大学ではこれはまだないと、まことに残念だと、日本の大学もこれをやれと、こういう記事がみえています。

やっと今日、日本では如何にして大学の講義を公開するか、この議論が起っております。昨日、おとついと東京におりまして、私立大学関係者が300人ばかり集まって、2日間にわたって講座をもちました。だいたいどこでも公開講座は今もっておりますけれどもね。現実には生の講義を民衆に開放したという大学はまだございません。私は15年ばかり前に、谷本先生の本に書いてあったこれを思い出して、よしやろうということで、教授会に提案しました。実験の公開はなかなか大変でございますけれども——例えば家政科の実験は——しかし文学部の講義はこれは聞かせてやると。少なくとも母親、卒業生、いつでも誰でも聞きに来いと、やったんですが、初めは来ましたね。十数名、二十名来たこともあったですけれども、私の講義もうしろで聞いている。いや前に来て聞いているおばあさんもあったんですが、だんだん少なくなりました。今では時々しかみえません。というのは、そこまで学問というものを要求していない。カルチャーセンターというような所へ行ってそこで聞いているのはかなり増えております。これは新聞社がそう言ってますけどね。大学にきて息子や娘といっしょに親やじいさんばあさんが聞くという、既にフランスでは明治38年にこれができている。

今、生涯教育という言葉が使われます。生涯教育きつとやります。文部省自体が社会教育局を生涯教育局に名前まで変えると言っていますから。生涯教育とは何か。生まれてから死ぬまでの教育、ま、こう言いたいんでしょうけれども学校教育という立場がありますので、たぶんその中で学校教育を除いて、しかしながら関係は密接に持ちながら、一生涯の教育というものを考えなきゃいけない。教育は生まれてから死ぬまで、いや将来も続きますからね。こういう事できつと将来、これが出てくると思います。いかに京都大学が市民に対し、民衆に対して、この学問・真理を説く講座を公開

するか。こういうことは大変大事な問題だと。谷本先生はこれを明治38年に紹介されて、できる限り日本の大学を、早くこうなるべき、なる必要があるんじゃないかと、こういったことを訴えておられます。「最新教育学大全」大正11年、大変膨大なものでありますけれども、晩年にはそういった宗教と教育についてお書きになったものが多うございます。

谷本先生が乃木大将事件でおやめになられますと後にみえたのが私どもの恩師であった小西重直先生であります。明治8年、米沢に生まれられた。明治31年、第二高等学校卒業。東京大学哲学科入学。井上哲次郎、大瀬甚太郎、小泉八雲に影響を受けたということでもありますけれども、その頃、日本の教育学界はヘルバルトというものが中心でありました。ヘルバルトというのはこれは偉い学者です。ドイツの。いやしくも教育学をやる人は必ずヘルバルトは——学問的な組織者でありますから、教育学の——これは読まなきゃいけない。ペスタロッチとかフレーベルとかルソーというようなものは、やっぱり教育思想家でありますけれども、学者とはちょっと言いにくいのがヘルバルトはそういう教育思想を学問的に系統づけた。こういうわけで、やはり明治の初期にヘルバルトが入ってまいった。谷本先生などがまあこれをお説きになった。小西先生はそうでなくて、これが小西先生の教育の大変特色のあるところ、ジャン・ジャック・ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、こういうところに注目されたのが小西先生ですね。つまり、学問のもっと根底に教育的な信条、思想、これがあるはずだと。それをもとにして自分自身のものを作ろうというのが、これが小西先生の立場でございましたね。京都の教育学というものは、ですからはっきり言って東京と違いました。それは担当の教授の立場というものが違うからであります。34年、大学の卒業論文が「倫理上の自我」という論文。銀時計をもらっておられます。昔は大学の優秀な卒業生には天皇から銀時計が贈られた。小西先生はこれをもらっておる。すぐに留学されます。ドイツに行って誰についたか。フォルケルト (Volkelt) についた。そのフォルケルト



九代総長 小西 重直

の文庫が今、私の大学に全部揃っておりますけれども。小西先生には大変影響があったろうと思われまね。帰ります時に有名なグローブの書いたシュタントのペスタロッチの絵をもって帰られた。彩色版は後で広島の高田新先生が持って帰られたんですけれども、彩色でないものを持って帰って日本中の多くの小学校にペスタロッチのあのシュタントの写真が出たのは小西先生がお持ち帰りになった土産でございますね。38年に広島高師の教授。そして大正元年、第七高等学校校長。鹿児島じゃ第七高等学校造士館長と言っておりました。わずか10カ月であります。大正2年、京都大学教授で迎えられた。ここで教育学の講義をされた。昭和4年に文学部長、昭和8年京都大学総長。そして有名な滝川事件の時に、大変苦労され、ついに健康を害してお退きになったのであります。岩波からあの京大事件についての一冊の本が出ております。法学部が中心にお書きになったものと思えますけれども。その序文にこう書いてありますね。「それは大学における学問の自由、独立の精神を多年、生きいきと保持してきた京都帝国大学の総長としての権威にふさわしいものであるとともに、教育学者としての小西博士の学者的生涯を飾る最も顕著な事績の一つに加えられるべきであろう。」と、このように書いてあります。私は卒業の翌年でありました。体が元気なもんだから徴兵にとられた。伏見の九聯隊で幹部候補生。日曜は外出が許されますね。そのたびにまず先生のお宅、玄関までまいりました。「先生、大変です」と、

「健康だけは」と申したんですよ。お会いするたびにだんだん衰えていかれる先生。目に見えてその衰えがみえた。弟子としてまことに沈痛な気持ちでありましたが、ついに京大事件がああいう立場で終わったわけでありましてけれども、これが京都大学としては、先の沢柳事件、次の京大事件、二つの事件によって京都大学というもの、その自治というものに対して大きな試練を受けたわけでございますね。

沢柳先生は沢柳事件については最後まで自分が間違っていなかったと言っておられます。7人の教授を罷免させたのは、これは文部省の側のいろんな干渉もあったようであります。しかし先生はそれをおっしゃらんで、「私がやめさせた」と、大学教授として資格がないと思った、とこういう言葉でございましたね。これは大変複雑な気持ちだと思えますけれども、しかし世の中に沢柳事件というものやはりこれは総長の一つの批判のまゝとして残されていますけれども、残念ながらこれは真相をつかむことはむづかしゅうございます。滝川事件はそこへいきますというと、いくらかつかめますね。おそらく多くの名誉教授の中には滝川事件、大学を守ろうとして学生大会、そこでみんな血判を押した人達もおった。今から考えますと不幸な事件でございました。

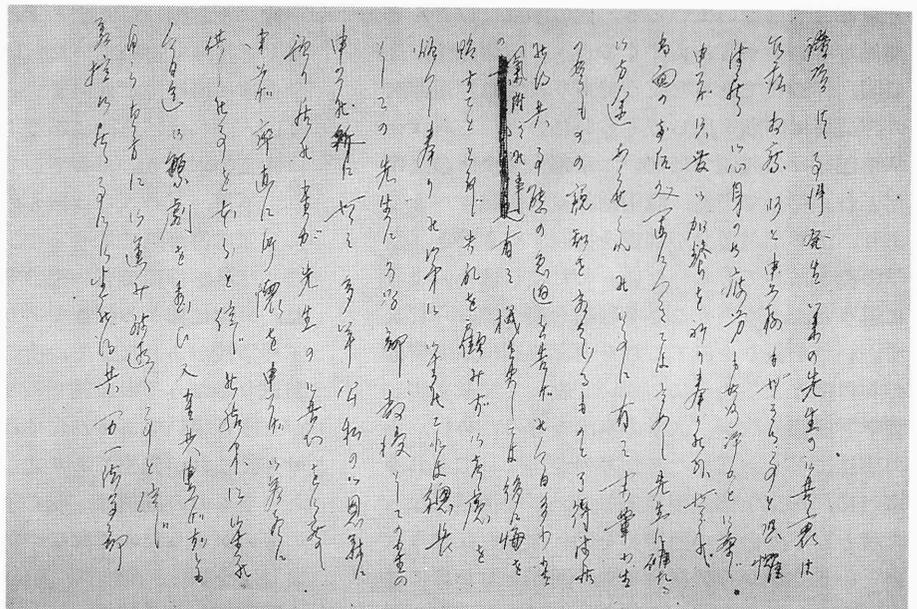
京都大学は常に在野精神が強かったと言われております。東京大学は官吏養成である。つまり政府の役人を造るのが東京大学の大きな仕事。京都大学は在野精神、自由に伸びていけるという。ですから初めてできた時の大学教授、文学部の教授をみますというと、本当に大変な在野精神、本当に自由に満ちた方々が入っておられる。それがやがて滝川事件というものを起した。またあの事件によって京都大学は自分自身の自治というものにより一層強く感じ取り、これを養ったという、そういうことになろうと思うのであります。

西田幾多郎と申しますと、大変な哲学の権威でありますね。まさに「権威」と言っている。なかなか権威という言葉は人間には使えませんが、西田先生はこれにふさわしい方だと思います。わたくしども昭和4年に入って何よりもまず西田先生

の講義を聞けると喜んでいました。もう先生は退官されていました。がっかりしましたがね。しかし、その後を引き継がれた田辺先生、これがまた大変な碩学でありました。この講義を受けました。しかし三学期には田辺先生はその特殊講義をお休みになって鎌倉から西田先生と呼ばれて、5回か6回講義がございました。3年続けてございました。その講義が岩波から出ました。「一般者の自覚的体系」、「無の自覚的限定」、あれがその時の講義でございますよ。それはそれは難しい講義、それを懸命に聞いたというのは大変な幸せでございましたね。その西田先生の後を引き継がれた田辺先生が——これは小西先生に伺ったことでありますが——西田幾多郎先生ほどの人がやめますと、後、誰がその後を継ぐかというのは大変な問題です。これは京都大学だけでない、日本中の大学がそうです。誰が後をつぐかと。助教授は田辺先生、しかしお若うございます。哲学科にはいろんな長老がおられましたよ。ね、哲学史ならば朝永三十郎先生、宗教学なら波多野精一先生など。いずれもどこの大学へ行っても立派に哲学の講義が出来る人。文学部長・藤井健治郎、評議員であった小西重直。あれは苦勞したとおっしゃったんですよ。そして田辺先生に決った。

その田辺先生。哲学者が滝川事件をどう考えたか。これは余り記録がございません。幸いなことに、小西先生が亡くなられて、たまたま私が京大の教育におったものですから、奥さんに呼ばれて、いくらかのものをいただきました。先輩達もわけました。わたく

しが特にいただいたものに長い間見ないでおったものがございました。最近これを見ますと、手紙でございました。約30通ばかり。これはえらいことですね。いろんな人の手紙があります。陸軍大将もあれば右翼もあれば左翼もある。たくさんございます。小西先生台下と書いた6月4日付、田辺元という手紙がございます。この他にもう一つございます。その後の二つは小西先生が体調をくずされて総長をお退きになったのですが、それに対する田辺先生のお慰めの手紙です。小西先生の態度は実に立派だという、どうぞ病気になられた先生は大事にしてもらいたいという、これでございます。〔聴衆に提示〕。今一つのものはここにありますが、さて奥さんも亡くなられましたね。先生も亡くなっておられますから、これをどの程度発表していいか、今、私は困っているんですけどもね。しかし、天下の哲学者田辺先生がああ滝川事件をどう思われたか、これは我々にとっては大変参考になります。田辺先生の字はむづかしい字です。こういう字でございます。見えませんか。実にむづかしいでございますよ。この手紙は、一文学部教授が総長に対して差し上げるのではないと、こう書いてあります。いろいろな面につい



田辺元教授から小西総長あての手紙（6枚のうちの最初の1枚）  
 (鏡坂名譽教授御所蔵。先生の御厚意により複製のうえ、掲載させていただきました。)

てほんとうにお世話になった一人の人間として、  
こういった大問題に当面された小西先生に対して  
心をこめて、間違いがないように、大変失礼だが  
自分の思うことを卒直に申しますと書いてありま  
すね。候文でございますけれども

「機を失しては後に悔を貽すことと存じ、失礼  
を顧みず、御考慮を煩わし奉り候次第に御座  
候。これは総長としての先生に文学教授として  
の小生の申上候所に無之多年、公私の御恩義に  
預り居候小生が、先生の御苦心を御察し申し上  
げ、卒直に所懐を申上げ御参考に供し候事云々」  
とこう書いてございます。まことにこういった  
書き方もあるものかと思わせるような手紙でござ  
います。法学部教授がそろって辞表をお出しにな  
った。滝川助教授をやめさせろという文部省の干  
渉があったのでありますね。これに対して大学の  
自治を守るため、法学部教授達が全員辞表を出し  
た。大変なことですよ。考えてごらん下さい。京  
大法学部全員が辞表を出したとしたら、それはえ  
らい事です。小西先生は総長として如何に大学の  
自治を守るか、大変苦勞された。田辺先生はその  
お姿をみて、自分はこう思いますと書いてある。  
“今見てみると、文部省と総長と法学部とこの線  
で京都大学は動いていると、他の学部はほとんど  
関係がないようにみえてくると”。田辺先生、そ  
の頃、評議員であったようでありますね。是非次  
の評議会に問題を出してもらいたい、これは一  
法学部だけの問題ではない、京都大学全体の問題  
だとね。そして当然、滝川助教授は復職すべきで  
あり、法学部教授会が辞表を撤回すべきだと、全  
学の動きにしてもらいたい。わたくしはそのよう  
に思うと、こういうことを縷縷と述べておられま  
す。いつか折りをみてこれを全部印刷にして皆様  
のお目にとまるようにしたいと思っております。  
哲学者田辺先生が、大学の自治を守るために、あ  
の事件にどうお考えになったものか、そしてそれを  
本当に、一文学部教授じゃない、長年世話になっ  
た者として懸命に小西総長を助けなければならな  
いという立場から評議会にこの問題をおかけにな  
ったがよかるうと、こういうことでございますね。  
問題はしかし意外に終わりました。小西先生はいつ

も言われましたね、やっぱり自分が大学の自治を  
守ろうと懸命にやったんだと、鳩山文相と何回会  
ったか。ついに残念ながら体がもたなかったとね。  
君たちも体は大事にせよと、こうおっしゃって  
おりました。皆さん方これから日本もいろんな事  
に出会うだろうと思われます。私たちはそれを懸  
念に解決しなければなりません。それには健康で  
なければいけません、心身共にね。もし小西先生  
の健康が続いたならばどういふ具合になったもの  
か想像するだけであります。

小西先生という方はこういう字をお書きにな  
った。読めませんですよ。こういう手紙が来るん  
です。私は近衛通りの大学の学生寮にいたのです  
が、葉書にばあーっと書いてある。「来い」とい  
うのか「来るな」というのかどうもわからない。  
電話をかけてお尋ねしてみますと来てもらいた  
いんだと。そこで急いで先生のお宅に行ってみ  
ますと、今日は日曜、頼まれているから字を書  
く、墨をすってくれと。そして墨すりのご注  
意がある。墨は力を入れてすっちゃいかんとお  
っしゃる。十くらいの女の子になったつもり  
ですれ、と。それで30分ぐらいすりまし  
たか。墨汁を半分入れましてね、あの時には、  
7、8枚お書きになったか、私にも一枚、と  
お願ひしますと「おー、おー、書いてやる」  
と言って書いていただいた。今、私の大学の  
学長室に掛けてございます。“躬行は教えの本  
なり”、これは言志録にある「躬行を以て教  
うるは教えの本なり。言わずして教うるは教  
えの神なり。不言、言わざるは教えの神なり」  
と。これ実に立派に書かれてあります。先生は  
達筆でしたよ。これは私が静岡で若い視学を  
している時に先生はね、果物は柿がお好き  
でありました。次郎柿の出る農学校があり  
まして、そこからわざわざでしたがお送りし  
たらそのお礼でありますね。なんかありが  
とうと書いてあるんだけど、どうも読め  
ません。これが先生でありました。昔の教授  
と弟子というものの間柄は、親と子、ある  
いはこれ以上のものがあつたのではない  
かと言つていいでありましょう。

昭和12年4月22日、わたくしは29才。どうい  
うわけですか、視学を命ぜられた。浜松の師範学校

で3年おりました。そして視学になり、やがて視学官の仕事、教育行政の仕事をおおせつかった。話をうけまして、すぐ先生に電話したんです。「先生、若い私に視学になれといいますが、どうでしょう」と言ったら、先生「うーん」と言われた。「よかろう」と、それで視学を拝命した。そうすると2日ばかりたった時、この手紙がまいりました。初めの方には京大出身、哲学出身のある人をどっか師範学校にとれないかという、それが書いてある。そして「露骨に念の為申し候。御承知の通り、視学となると色々の意味から教育家より時に贈答品などあり、それが嵩み積り、遂に各地に疑獄事件起り来る次第なり。土地の産物にて高価ならざるもの、または——または何でしたか、これちょっと読みにくいんです——なんとかなるお菓子位は世間一般の交際上の情誼として差支えこれなく、しかれども最近この方面に神経が鋭く、これらの品物も特別の場合は別として、原則として断るよう、または返品して潔癖を示すくらいが丁度よろしく候。商品切手のごときは必ず直ちに返送して然べき候。なかなかやっかいなものにご座候。阿々」と書いてある。視学になると、ものをもらうぞと、もらうなよと、その辺の菓子折ぐらい、このぐらいはまあ世間一般のつき合いでいいかもしれないが、それもなるべくもらわんがいい。商品切手はすぐに送り返せとね。こういうことを手紙に書いてくる人はありがたいですよ、これは。親ですがな。私はこれをもものにも書き、人にも話しますけどね。こういったものが本当に恩師というもんだらうと。普通書きませんが、こんなことは。私も教え子は、もっとも視学になっておりませんが、ですけども、どこどこの大学の助教授になった、こういうことは慎しめということはまだ書いたことはないです。そのうち書こうと思つてますけども。本当にありがたい先生だったと思つてますね。ですから、全部小西先生に従いました。誤解している人があります。大変温厚な人であったもんだから、あの滝川事件をてきばき処理しなかったという、それは間違いです。そうじゃなかった。非常に強く京都大学の自治を守り、どのくらいがんばられたか。ついに心身強度の疲労でお

退きになったという、こういうことであります。

西田幾多郎先生の名前が出ました。先生の字は今日もそこにはってある。これは小西先生のお母さまが亡くなられたその時に会津若松市小西重直様と。西田先生の書であります。これも処理しているうちに出て参りました。こんなきれいな文字ですね。〔提示する〕今日ご覧になる文字もそうだと思いますけどもね、これは西田幾多郎先生が小西先生に対するおくやみの。「敬、その後ご無沙汰致し居り候。承り候えば御令母様、御病気のところ御療養かなわされず、終に御逝去の由、貴兄はじめ皆様愁傷の御事と深くお察し申し上げ候。もはや御高令の御事とは存じ上げ候が、いつまでも親は親であり、無限の寂漠をお感じの事と存じ候。まずはお弔いまで、余は拝眉の上、草々。9月11日西田幾多郎 小西重直様」こういったきれいな字が書いてございますね。これをお廻ししますからご覧下さい。西田先生の字でございます。どうぞ。

さて、小西先生がお退きになりますと、京都大学の教育学は西田門下の秀才であった、いや秀才という言葉は先生に対して失礼かもしれない。それは秀れておりますけども、実に人間の素直な、本当に純情なよく出来た木村素衛先生が後を継がれた。木村教育学は根底は西田哲学でありましょうね。小西哲学は根底はルソー、ペスタロッチであります。谷本哲学は、教育学は根底はヘルバルト、つまり、まずヘルバルトが入ってきて、つぎは小西先生のルソー、ペスタロッチ、フレーベルになる。木村先生で西田哲学に立った教育学を打ち立てられた。こういつて間違いないと思つて。詳しくこれを読みたいという方は、まず先生がお書きになった「表現愛」という、岩波から出た大変きれいな哲学の本がございます。美学論といつてもいいでしょう。そしてまた、教育論といつてもいいかと思つて。あの「表現愛」をまずお読みになること。そして「国家に於ける文化と教育」これはヘーゲル哲学を中心に国家の問題を説き、そして教育の問題が説かれている。あのまん中ごろに教育愛の問題というのをきれいな文章で書いてございますがね。今日は持ってきておりません

が、私は自分の著書の中に、大変長い文章、先生にお借りして書いています。教育愛というものを説いたものとしては、実に優れた立派な論文であります。お読みいただきたいと思います。先生は体の弱い方でありました。にもかかわらず、良くお書きになった。わたくしが浜松師範に初めて行った時に、こういう手紙をいただいております。こういった字を書く方。ちょうどこれは西田先生のさっきの字とそっくりですね。先生に傾倒すれば字までも似てくるかと思う。これは木村先生の字。木村先生という方は学部卒ではない選科の卒業ですよ。文学士という称号はございません。文学博士は持っておられますけれども、体が弱く長年寝て、学部学生じゃなくて、選科で西田先生の講義を聞いたという方です。字まで似てますね。こう書いてある。「お手紙ありがとう。御在京の日が短くて、ともに語る日を多く得られなかったことは実に残念です。」ちょうど私は軍隊に参っておりました。初めは篠原助市、長田新という先輩がみえて講義をなさった。木村先生に替りまして、まだ助教授であります。木村先生の講義は少ししかお聞きできませんでした。11月に軍隊を終って、2月10日これまでわたくしは木村先生の講義は一回か二回しか聞いておりません。ですから、多く語る日をもたなかった。残念だったと大変御親切に。「新学年を迎えられて、新しい希望が輝いでいることでしょうか。師範的牢獄から若人の霊を解放してやってください。」師範的牢獄、と書いてある。先生は広島の高師、広島文理大で助教授として講義されていた。哲学の講義。そして広島から京都大学文学部教育学の助教授で帰ってこられた。高師というものをよくわかっておられました。師範的牢獄から若人の霊を解放せよと書いてある。「窓からみていると、木々の梢が赤らんで水を吸い上げました。ああいう風にすすくと大胆に光を慕って伸びる生命を守りたいものです。この頃の気候不順はひどいですね。ちょっとした風邪がそのために治り切らないで、軽いものばかり読んでその日を送って

います。御自愛精々、4月3日 木村素衛」こう書いてある。やあ、実にいい手紙ですよ。私はこういう手紙を自分の教え子に書いたことはないです。いけないなあと思います。こういう手紙をくださったのが私どもの恩師でありました。学問的なヘルバルトが入って来、そして小西先生でルソー、ペスタロッチ、フレーベル、この花が咲き、木村先生で西田哲学を根底にした教育学ができた。まさに「国家に於ける文化と教育」がそれで書かれた。東大から京都大学に非常勤で講義に来られる方は、必ずあの「国家に於ける文化と教育」と「表現愛」は読んで来たという。京都に来てきくと木村さんの弟子たちは手強いぞというので読んで来たよね。

「時は永遠の影である、と西田先生が言っておられますね。どうこれを理解しますか。一人一人違った立場で理解があるだろうと思います。影、をいっただう考えるか。時、をどう考えるか、永遠、というものをどうみるか。時は永遠の影である、と、そうしますと時というものはすでに70年過ぎた、90年過ぎた、やがて100年といいますが、いつも永遠の影として一点に結集することができる。西田先生の哲学はむずかしい哲学。今、我々は子ども、若い学生たちを前にして時は永遠の影である、という立場で彼らを見ているのでしょうか。うっかりしますと教壇の上から偏差値ばかり問題にしている。共通一次をやるかやらんかばかり考えている。文部省がそうであり、教育の現場がそうではありませんまいか。時は永遠の影、人間は何か、その教育とはどういうことか、かって私どもが優れた三人の恩師によって演じられたああいう教育学というものを取り返してみたい。いや、そうなきやいけないと思います。しみじみとね。

大変光栄な場所と時間を与えてもらいましたけれども、いかほどのことも申せませんでした。かえって主催者に対して失礼であったかと思えますけれども、これでもって終りたいと思います。ありがとうございました。(拍手)